千葉市美術館
アーティストプロジェクト
報告書

つくりかけラボ16
金川晋吾 | 知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない

会期

2024年　　2025年
10月12日(土) – 1月26日(日)

アーティスト

金川晋吾

テーマ

コミュニケーションがはじまる

概要

「つくりかけラボ」とは、「五感でたのしむ」「素材にふれる」「コミュニケーションがはじまる」いずれかのテーマに沿った公開制作やワークショップを通して空間をつくり上げていく、参加・体験型のアーティストプロジェクトです。

第16回は、写真家の金川晋吾さんをお招きし、“自分が写っている写真”を起点としたプロジェクトを開催しました。主軸となったアーティストワークショップでは、金川さんと6名の参加者が、生まれてから現在までの自分が写っている写真を持ち寄り、それらを壁面に貼りつけ、言葉を記すワークをおこないました。写真を介した活動の数々は、自己と他者、そして過去と現在と未来を幾度となく行き来し、内面的で親密な対話を呼び起こしました。

アーティストワークショップ：

「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」のためのワークショップ

2024年10月20日（日）、11月9日（土）、11月30日（土）（連続3回）
講師：金川晋吾
参加者数：6人（内田ちよ子、川又健士、喜屋武綾香、草野椿、茂木健介、森下聖子）

金川さんがファシリテーターとなり、公募で集まった6名の参加者とともにおこなったアーティストワークショップは、本プロジェクトを構成する最大要素となりました。ワークショップの持ち物は、「生まれてから現在までの自分が写っている写真」。参加者は、それぞれに与えられた約2×3mの可動式の白い壁面に持ち寄った写真を貼りつけ、その写真から想起される言葉を綴っていきました。3日間（参加者によっては追加の作業日）を通して、金川さんとの対話を重ねながら、写真を選び、並べ、貼り、書くことが繰り返されました。

オープンワークショップ：自分の写真と言葉

スマートフォンに保存されている写真から、自分が写っている写真を 3 枚印刷し、言葉を綴ってワークシートをつくるワークショップ。アーティストワークショップを追体験できる内容として実施しました。

会期中いつでも参加可能／参加者数：190 人

トークイベント：
ヴァナキュラー写真という観点から「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」について話してみる

2024年12月21日（土）
登壇：金川晋吾、安田和弘（写真研究者）
参加者数：31 人

トークイベント：
参加者と「『知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない』のためのワークショップ」を振り返る

2025年1月12日（日）
登壇：金川晋吾、内田ちよ子、川又健士、喜屋武綾香、
草野椿、茂木健介、森下聖子（ワークショップ参加者）
参加者数：25 人

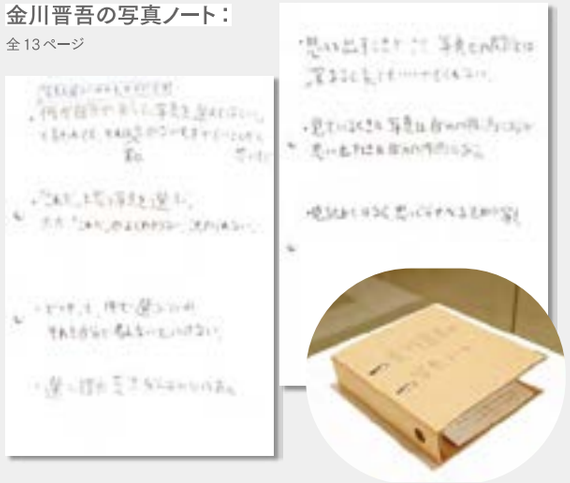
トークイベント：
「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」における写真と言葉と自分の距離

2025年1月26日（日）
登壇：金川晋吾、丸山零（美術家）、川又健士（ワークショップ参加者）
参加者数：16 人

トークイベントの文字起こしはこちらからお読みいただけます。

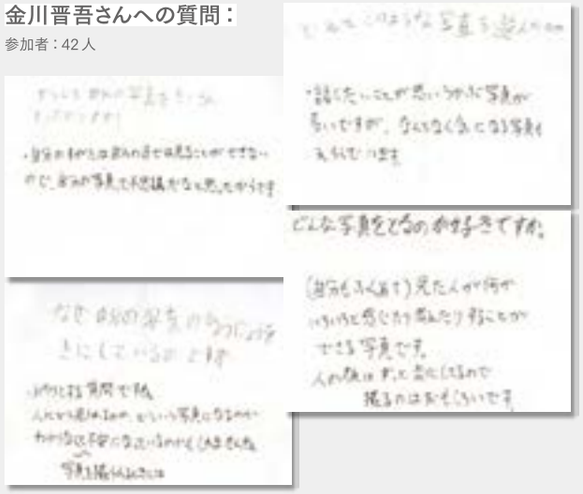
金川晋吾の写真ノート：

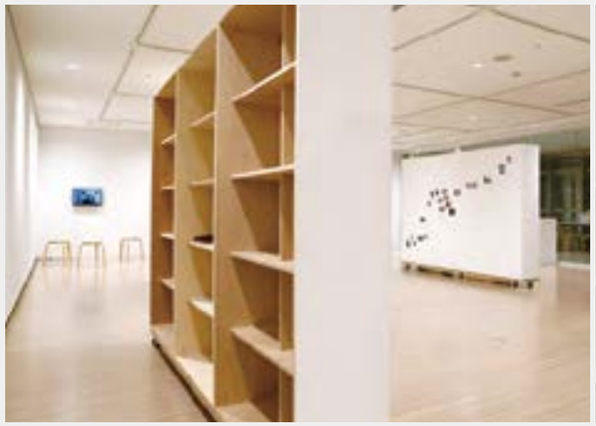
全 13 ページ



金川晋吾さんへの質問：

参加者：42 人





「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」を終えて

話し手：金川晋吾／聞き手：庄子真汀（千葉市美術館学芸員）／編集・執筆：金川晋吾

── つくりかけラボの企画をはじめに聞いたときは、どういったことを考えていましたか？

参加者の人たちが他の場所ではあまり語れないようなことについて語れるような場所にしたいとか、自分の言葉で語りたいことについて語れるような場所にしたいとか、そういうことを考えていました。だから、最初は写真も使わないで、人が集まって話をするための場にしようかとか、そういうことも少し考えていました。
そうやってまだ何をやるかを考えている段階のときに、庄子さんから、「身近な親族が亡くなって、お葬式の時に生前の写真をスライドショーで流すことになり、その人が写っている写真のなかから 20 枚ほど選ばないといけないということがあった」という話を聞きました。それはなんだかすごい経験だなと思い、もし自分だったらどういう基準で選ぶだろうか、選ぶことはできるのだろうかとかいろいろと考え、今回の企画につながっていきました。私自身が、自分のことについて語る作品を作ったり、そういう文章を書いていたり、また最近ではセルフポートレートの写真を撮っていたりしていたことも影響していると思います。

── 実際にアーティストワークショップをやっていくなかで、苦労したこと、むずかしく感じたことなどはありましたか？

ワークショップをはじめる前は、膨大な量の自分が写っている写真のなかから、壁に貼る写真を選ぶのはけっこう大変なことではないか、選ぶための理由を見つけられないのではないかと心配していたのですが、実際にやってみると、自分も含めた参加者全員がいい意味で「適当」に写真を選ぶことができたと思います。別にどの写真を見せてもいいみたいな気持ちになれたのは少し意外で新鮮でした。
このワークショップをどういう目的でおこなうのか、そのゴールをはっきりとさせなかったので、参加者のみなさんには各自で自分なりの目指すべき方向を見つけてもらわないといけないというむずかしさがあったと思います。ただ、参加者のみなさんはそのむずかしさをむしろおもしろがるというか、考えるべきこととして壁に表現してくれました。自分について語るとはどういうことなのか、自分について語ることと自分が写っている写真について語ることのちがいは何なのか、かつての自分（の写真）と今の自分はどのように関わることができるのか、等々の興味深い問いや、その問いにまつわるさまざまな言葉が出てきました。

── 今回のワークショップは写真と言葉の両方について考えるための時間になったと思いますが、写真と言葉の関係について何か思ったことはありましたか？

写真は言葉を喚起するものだということを、そして、写真は言葉を待っているということを改めて実感しました。ただ、そうやって喚起された言葉は写真からはむしろ遠ざかっていく方向に展開していきました。写真を前にするとむしろそこに写っていないことについて語りたくなるということが起こり、当たり前と言えば当たり前なのかもしれませんが、それがとても興味深かったですね。

── テーマのひとつとして「自分」というものがあったと感じます。「自分」について何か新たな気づきなどはありましたか？

何かいろんな自分がいるということ、しかもそれが時間軸に沿ってまっすぐに並べられるようなものではなくて、もっとばらばらであっちこっちにあって、自分でも知らない、忘れているような自分がいるということ、そして、そういうばらばらな自分というものは何度でも書き直すことができるということ、そういうことを以前よりも実感できるようになった気がします。今回こういうふうに感じることができたのは、大きな壁がまずあってそのうえに写真や言葉を積み重ねていき、何度も貼り直したり書き直したりできたということが関係していると思います。アルバムのような単線的な構造ではない、空間的な広がりのなかで自分の写真を見渡すという経験が自分にとってはかなり新鮮なことでした。

自分を仮止めする

庄子真汀（千葉市美術館学芸員）

「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」の根幹をなしていたのは、会期中 3 回にわたっておこなったアーティストワークショップであった。金川さんと 6 名の参加者が、長い時間をかけて自分が写っている写真を壁面に貼り、言葉を書くことをおこなった。こうまとめると簡潔な作業に思えるが、もちろん実際はまったくそうではなかった。それは、ひたすら「写真を見て、考える」ということの反復であった。

「写真を見る」ことは、ワークショップの根源的な活動となった。まず、ワークショップに持ってくる写真を選ぶ。さらに、壁面に貼る写真を選ぶ。くわえて、そこから思い起こされる言葉を書く。これらは写真を見ることなくしては達成されず、ワークショップの活動ひとつひとつが、写真を見ることからはじまっていた。

「自分が写っている写真」の有無は人によってさまざまだ。ただ、今回の参加者についていえば、それぞれかなりの量があるようだった。そして、生きてきた時間が長ければ長いほど、その写真は増えていく。参加者は、ひたすら写真を見つめ、考え、さらに見つめ直した。

しかし、写真を見ると“なに”が見えてくるのだろうか。写真に写っている以上のものが、イメージとして現れることはない。L 判に定着した像は、そこから動かない。参加者は、自分が写っている写真に“なに”を見ていたのだろうか。

会期中に行ったトークイベントで、しばしば金川さんの口から『明るい部屋 写真についての覚書』の名前があがった。『明るい部屋』は、フランスの批評家であるロラン・バルトが 1979 年に書いたテキストをまとめた本で、批評ともエッセイともいえるトーンで写真について語られている。そのなかに、このような記述がある。

たとえば、一九三一年にケルテスが撮影した、幼い小学生エルネストは、現在まだ生きているかもしれない（しかし、どこで？　どのように？　それは、なんと小説的なことであろう！）。私は、あらゆる写真の位置を定める座標系となるのであって、写真はまさにこの点で私を驚かせ、私に根源的な問いかけをおこなわせる。いったいなぜ、私はいま、ここに生きているのか？　と。[1]

「私は、あらゆる写真の位置を定める座標系となる」。つまり、その写真をまさに見ている者が、その写真の基準をつくる。写真そのものには「それは＝かつて＝あった」[2] という事実しか写っておらず、それ以上に“なに”が見えるかは、見る者によって左右されるのだ。「写真を見る」ことは、とあるイメージが万人にまったく同じように見えることではなく、見る者の内面において起こる。

このワークショップは、参加者それぞれの座標系において、写真をとある位置に定めていく行為の繰り返しであったように思う。写真を 1 枚 1 枚任意の場所に貼りつけ、さらに言葉を添える。その結果、ある参加者は自身のコンプレックスと向き合い、ある参加者は人生の分岐点を見つけ、ある参加者はこれまで語らなかった家族の話を明かした。ただ、それは“固定”ではなく、あくまで現在の参加者の座標系を基準とした“仮止め”である。

さらに、ワークショップの経過や成果を展示物として来場者にひらくことで、会場では二重の「写真を見る」が生じた。参加者が見て、選んで、定めた写真を、来場者がさらに見る。参加者と来場者の座標系が重なり、写真はまた新たな位置に定められる。ここでは、自分の写真／他人の写真という差異にくわえ、写真に添えられた言葉の膨大な情報量もあいまって、複雑な鑑賞体験が生じただろう。

金川さんは、ワークショップの参加者を募集する際のメッセージで、「何をワークショップのゴールとするのかはまだ決まっていません。私もよくわかっていません」と書いた。プロジェクトが終わったいま、なにがゴールであったのか、なにを達成できたのか、正直なところ明言することは難しい。ただ、それで良いと感じている。なぜなら、きょうと同じ自分はおらず、それゆえ写真の位置も日々変わっていくのだから。これが、「知らないうちにはじまっていて、いつ終わるのかわからない」ということなのだと思う。

*1 ── ロラン・バルト『明るい部屋 写真についての覚書』花輪光訳、みすず書房、1997年、p.104
*2 ── 同前、p.94

つくりかけラボ16
金川晋吾｜知らないうちにはじまっていて、
いつ終わるのかわからない

会期
2024年10月12日(土)–2025年1月26日(日)

主催
千葉市美術館

会場設計・施工
細谷悠太

システム制作
曽根貴了
大庭吉景
長澤十生

グラフィックデザイン
関川航平

作家滞在日
10月12日(土)、20日(日)、11月3日(日)、
4日(月・祝)、9日(土)、30日(土)、12月16日(月)、
18日(水)、21日(土)、1月12日(日)、17日(金)、
20日(月)、24日(金)、26日(日)

来場者数
6,561人
(大人5,338人、高校生以下1,223人)

「つくりかけラボ16
金川晋吾｜知らないうちにはじまっていて、
いつ終わるのかわからない」報告書

執筆
金川晋吾
庄子真汀

撮影
天野祐子
金川晋吾
千葉市美術館

デザイン
関川航平

表紙フォーマット
加藤賢策(LABORATORIES)

印刷
吉原印刷株式会社

編集・発行
千葉市美術館

発行日
2025年6月10日